待遇表現に働く要因
―日本語・スペイン語対照研究―

The factors that work on attitudinal expressions：
A contrastive study of Japanese and Spanish

竹内　さあや

―はじめに―

本稿では、現代語における日本語とスペイン語の待遇表現の現象分析を行い、両言語にみられる話者間の言語を介した距離の取り方について考察する。話し手がその場に適した待遇表現を選定するに当たり、影響を与える要因は「(相手の)年齢・社会的地位」、「話題」、「場面」、そして相手に対する親近感や信頼度といったものを意味する「心理的距離」と複数ある。中でも「年齢・社会的地位」、「心理的距離」は主要要因と捉えることができる。本稿では、メインクレームとして、日本語では「年齢・社会的地位」の要因が、スペイン語では「心理的距離」が優先されることを主張する。

スペイン語の待遇表現の代表例としてよく議論されるのが、対話における聞き手を指す人称代名詞“tú”と“usted”の使い分けである。一般に日本語の普通体に当たるのが“tú”で、敬語体に相当するのが“usted”とされ、使用場面も日本語と類似している点が多い。

しかしながら、スペイン語には、日本語に存在しない現象がいくつかあ

り、本質的には両言語の待遇表現は対応していない。例えば「目上の人物に対する待遇表現が敬語体 usted から普通体 tú に途中で代わる」という顕著に見られる現象がある。

目上の人物に対して敬語を用いることが社会的な規範とされている日本語母語話者にとって、この現象は慣れにくく、また usted から tú への適切な対話モードの設定が出来ないがゆえに、スペイン語母語話者に対し意図しない「よそよそしさ」を会話中に与えてしまっていることも少なくない。本稿の目的は、このような対話モードの設定に関わる要因を詳細に調べることで、日本語とスペイン語の言語を介した距離の取り方の共通点・相違点を明らかにし、筆者を含む日本語母語話者のスペイン語学習に資することである。資料体として、学習者向けに編纂された現代スペイン語の小説を用いている。

第１章　待遇表現

1.1. 待遇表現とは

我々は日頃、全ての場面において「同じ話し方」をしているというわけではない。適切かつ巧みにその「相手」、その「場面」に応じた対話モードへの切り替えをその都度行っている。『現代日本語文法⑦』（日本語記述文法研究会 2009：227）いわく、待遇表現とはこの「同じ事態を述べるのに，対人関係や場面差などに配慮して使い分ける表現」を指す。

さらに辻村（1958）によれば、待遇表現は三つに分類することができる。

●話し手が聞き手や素材を自分より上位者・優越者として遇する尊敬表現（敬語）

●同位者として扱う対等表現（通常語）

●下位者・劣勢者として遇する軽卑表現（卑語）

辻村（1958）

1.2. 日本語の待遇表現

辻村（1958）で見たように、日本語の待遇表現は「敬語」、「通常語」そして「卑語」に分けられる。本稿では、これ以降通常語を「普通体」という語で表現する。以下の例は、筆者による日本語の待遇表現の例である。

(1) a. 「お昼はもう召し上がりましたか？」 （敬語）
b. 「あの CD 貸して。」 （通常語）
c. 「何をほざいてやがる！」 （卑語）

1.3. スペイン語の待遇表現

日本語では待遇表現が動詞部分に現れることが多く、バリエーションも実に豊かである。一方スペイン語においては、話し手の尊敬や侮蔑といった感情を述語動詞が直接表すことは稀であるが、その代わりに話者間の関係性は使われる「人称代名詞」から導くことができる。本稿では、スペイン語の人称代名詞を待遇表現と捉え、日本語のそれと対照していく。対象とするものは、イベリア半島で使用されているスペイン語である。

江藤（2003：51）において、聞き手を指す 2 人称代名詞は次のように定義されている。

英語の you に当たるスペイン語の人称代名詞は、二人称では、tú と vosotros, vosotras、三人称は usted, ustedes である。原則として tú, vosotros, vosotras は家族、友人、同僚などの親しい間柄で使われる「親称」である。「名前、ファーストネーム」で呼ぶような間柄で使われると言ってもよい。また usted, ustedes は目上の人や初対面の人などに使う「敬称」である。苗字とか役職名で呼び合うような間柄で使われると言っても良い。

また、tú と vosotros（vosotras）は「親しさ」の効果と同時に日本語の卑語のような「侮蔑」の効果も持ちあわせている。さらに、日本語でも普段は普通体で話す関係でありながら、例えば夫婦喧嘩の際には相手に対す

るマイナスの感情からあえて敬語体が選ばれることがあるように、usted・ustedes も折の合わない相手に距離を取る際にも用いられる。

このように、日本語の普通体とスペイン語の tú・vosotros(vosotras)、そして敬語体と usted・ustedes は一致しているような錯覚に陥る。

しかしながら、冒頭でも述べたように、スペイン語には日本語を母語とする学習者をひどく困惑させる、ある大きな相違点、すなわち「自分よりも目上の人物に対する待遇表現が敬語体 usted から普通体 tú に途中で代わる」という現象がある。このような現象が何故生じるのか、次章で具体例を示しながら考察していく。

第 2 章　待遇表現の選定に関わる要因

2.1. 日本語における優先要因

まず、我々日本語母語話者はどのような場合にあえて敬語体で会話をし、どのような場合にあえて普通体を選ぶのだろうか。

待遇表現の選定に影響を与えるものとしては「場面」、「話題」、「(相手の)年齢・社会的地位」、「心理的距離」などが主に考えられるが、実際の使用においてはこれらのうちの一つが強く作用する場合もあれば、複数の要因が複雑に絡みあっている場合もある。

熊井 (2003：34, 35) の言うように普段は互いに普通体で会話をする間柄であっても、会議などの公かつ改まった「場面」や人の生き死になどの深刻な「話題」に配慮し、待遇表現が敬語体に変わることがある。

このように「場面」や「話題」が待遇表現に影響を及ぼすことはあるが、これは言うなればその場限りの一時的なものに過ぎず、普通体のまま述べたとしても相手への無礼さにはつながらないため、選定要因の中でも重要度は低いといえる。

一般的に日本語では、地域や年代の差を考慮しても「年齢」や「社会的地位」が自分よりも上の「目上の人物」には敬語を、自分と同等かそれ以下のレベルに位置する、あるいはそうみなす相手には普通体で話すことが

社会的な規範として広く受け入れられている。それでは日本語において「年齢・社会的地位」の要因と「心理的距離」の要因はどちらが優先されるのだろうか。

ここで前述の用語「心理的距離」について確認しておきたい。本稿において「心理的距離」とは「話し手の聞き手に対する信頼度」のことを指す。これは話し手の心理状態が作り出すものであるが、この「心理状態」は、現在会話をしている相手に対して向けられるものである。すなわち試験で満点が取れたから「嬉しい」、行きたかったコンサートのチケットが外れてしまい「悲しい」といった、聞き手が存在せずとも成立する、話し手だけの感情ではなく、あくまでその時、会話をしている相手に対して抱く心理状態、すなわち「親しさ」や「嫌悪感」さらにはよく知らない初対面の相手に対する「遠慮」などのことを指す。ここで挙げた「親しさ」がプラスの心理状態であるならば、苦手な相手への「嫌悪感」はマイナスの心理状態と捉えることができる。しかし、初対面の相手に対する「遠慮がちな感情」がプラスの心理状態でないことは想像ができるが、だからといって苦手な相手へのマイナスの心理状態と完全に一致しているとも言い難い。つまり初対面時の相手に関する知識が全くない状態は、プラスとマイナスのちょうど中間であるニュートラルな心理状態と位置づけることができる。しかしそのニュートラルな心理状態も相手のことをよく知らないがゆえ、「心理的距離」に置き換えてみると、「遠い」に分類可能である。

ここで、再び日本語において「年齢・社会的地位」の要因と「心理的距離」のそれとのどちらが待遇表現の選定時に優先されるのか、という当初の疑問に戻りたい。

例えば筆者には40代の友人がいる。いつも会う度に様々なアドバイスをしてくれる彼女に親しさはなおのこと、大きな信頼を寄せており、彼女に対する「心理的距離」も非常に近いものであると自覚している。「心理的距離」の面から見れば、他の同年代の友人たちに抱いているものと大差がないのにも関わらず、それでも筆者は出会いから現在まで彼女に対し敬語体を崩したことは一度もない。どんなに親しく心理的距離が近くとも、

彼女に普通体で会話をすることがどうしても阻まれるのは、相手が自分よりも年上の「目上の人物」だから―である。しかし、仮に彼女が同年代であったならば、迷うことなく普通体を選択するつもりである。これは苦手な相手との会話においても当てはまる。

確かに日本語でも、年齢や社会的地位が自分よりも高いのにも関わらず、普通体で会話をする相手＝、家族や親戚、昔から馴染みのある隣人などの例外はあるものの、このようなことはおそらく筆者に限ったことではなく、日本語母語話者であれば経験があるのではないかと思う。それゆえ日本語では通常「心理的距離」よりも「年齢・社会的地位」の要因が優先され、しかるべき待遇表現が選出されると考察することができる。

人は皆常に「年齢・社会的地位」、「心理的距離」、「場面」、「話題」など複数の要因の中から、待遇表現を決めなければならない各状況に応じて最も適したものを一つ、あるいは複数個選び出しているというわけである。そして日本語母語話者では「年齢・社会的地位」の要因が最も選ばれやすく優先されやすいといえる。このことを念頭に、次にスペイン語の二つの具体例を見ていきたい。

2.2. スペイン語における優先要因

一つ目の例は *El hombre que veía DEMASIADO*（1987：4）からの引用である。主人公かつ探偵のペペ・レイは 40 代位の非常に大柄な男性で、依頼人のホセ・ロカは正確な年齢は分からないが「青年」を表す“chico”という単語からおそらく 20 代から 30 代位であると推測できる。物語は、青い瞳が美しい端正な顔立ちのホセがペペの探偵事務所を訪れる場面から始まる。なお、これ以降の日本語訳は筆者によるものである。

(2)　＜引用 1 ＞

―Buenos días. Usted es el señor Roca, ¿verdad?

おはようございます。ロカさんですよね？

―Sí, José Roca. Mucho gusto.

はい、ホセ・ロカです。はじめまして。

―Encantado.

はじめまして。

Pasan al despacho. Se sientan. Pepe Rey coge un paquete de tabaco.

二人は事務室に入り、座った。ペペ・レイがタバコの箱をつかむ。

―¿Un cigarrillo?

(タバコを) おひとついかがですか？

―Sí, gracias.―dice José Roca, cogiendo uno.

はい、ありがとうございます。―ホセ・ロカが一本掴みながら言う。

―Bueno, ¿qué le pasa, señor Roca?

どうされましたか、ロカさん？

―La verdad es que estoy metido en un lío que no entiendo. Una amiga mía lo conoce, dice que usted es muy buen detective y por eso he venido a verlo.

実は理解できない面倒なことに巻き込まれてしまいました。私の女友達があなたを知っていて、とても良い探偵だと言うので、今日あなたに会いに来ました。

―¡Ah! ¿Sí? ¿Y quién es?

ああ！本当ですか？その友達とは？

―Laura Mínguez.

ラウラ・ミンゲスです。

―¡Hombre, Laura! Sí, sí. Nos conocemos muy bien. Oye, por favor, llámame de tú.

おお、ラウラか！そう、そう、よく知っていますよ。ねえ、tú で呼んでよ。

―Vale. Bueno, mira,(tú) yo estoy en Madrid pasando unos días para hacer un reportaje sobre las fiestas de San Isidro...

うん。それじゃあ実はね、僕はサン・イシドロ祭りのルポルタージュを作るため数日間マドリードに滞在しているんだけど・・・

彼らは当初初対面であることから、互いに丁寧さを表す usted で会話をしていた。しかし、ホセがペペの事務所に来たのは親しい女友達のすすめゆえであり、その友達がペペもよく知る人物であると分かった瞬間、ペペは「tú で呼んでよ。」と促し、そこからホセは結局物語の最後まで目上に当たるペペに、いわゆるタメロといわれる普通体で話しかけている。これは日本語においては非常に稀なことである。

次の例は *En piragua por el Sella*（1991：20 ～ 21，26）より取った。主人公のマヌエルは 17 歳の男の子で高等学校に通っている。アントニオは 40 歳かつ二児の父親で、とある事務所で秘書をしている。友人と船のレースを見に来ていたマヌエルであったが、足を負傷したことで電車に乗り遅れ、友人たちと逸れてしまう。一人歩けなくなっていたマヌエルをアントニオが偶然発見する所から二人の出会いは始まる。

(3)　＜引用 2 ＞

El hombre llega hasta la orilla, saca del río la piragua y, sin prisa, quita el agua que lleva dentro.

その男は岸に到着し、川からカヌーを引き上げ、ゆっくりと船内の水を外に出す。

—¡Por favor, por favor!— grita Manuel.

すみません、すみません！—マヌエルが叫ぶ。

—¿Qué te ocurre, chico?— pregunta el hombre y empieza a andar hacia él.

どうしたんだ？—男がそう尋ね、マヌエルの方に歩き始める。

Manuel le enseña su pie enfermo.

マヌエルは痛い方の足を彼に見せる。

—Te has dado un buen golpe, chico, pero no pareces tener nada roto. ¿Has venido solo?

自分で足をぶつけて怪我してしまったんだな、でも折れてはいないようだ。一人で来たのか？

―No, he venido con mi hermana y un amigo, pero están en el tren fluvial.
いいえ、姉と友人と来ました。でも彼らは水上バスの中です。

―Entonces te llevaré hasta el pueblo.
そういうことなら君を町まで連れて行ってあげるよ。

―Pero ¡cómo va a dejar el Descenso por mí!
でも僕のために川下りをやめてしまうのですか？

―No lo dejo. Te vienes conmigo en la piragua. Iré con cuidado.
やめはしないさ。君も俺と一緒にこのカヌーで行くんだ。安全運転でいくよ。

―Pero entonces va a perder mucho tiempo. Va a llegar el último.
でもそうすると時間がとてもかかってしまいます。最下位になってしまいますよ。

―Es igual. No tengo prisa. No voy a ganar este año el Descenso, ¿sabes? Yo sólo quiero pasear por el río en piragua y llegar a Ribadesella, sin prisa, con mi perro.
急いでいないから別に構わないさ。俺は今年レースで勝つつもりはないんだ、分かるか？俺はカヌーで川を渡ってゆっくり犬と一緒にリバデセジャに着きたいだけなんだ。

―¿Cómo se llama? ―pregunta Manuel.
お名前は何ですか？―マヌエルが尋ねる。

―Antonio Menéndez.
アントニオ・メネンデス。

Manuel se ríe.
マヌエルが笑う。

―No, usted no. Yo decía el perro.
いや、あなたではないです。僕は犬のことを言っていたのです。

＊＊＊

―Mis amigos no me van a creer si les cuento que he bajado el Sella sentado al lado de un perro. El año que viene me llevas(tú) contigo otra vez, ¿vale, Antonio?
友達たちは僕が犬の横に座ってセジャを下ったと話しても信じないだろう。また来年も僕を一緒に連れて行ってくれるよね、アントニオ？

この例においても、マヌエルはおそらく自身の父親の年齢に近いであろうアントニオに対し、初めは敬語体で会話をしている。目上が普通体（tú）で、目下が敬語体（usted）で相手を待遇するこの当初の形式は、私たち日本語母語話者にとって非常に「自然」なことのように思える。けれども、場面が変わり、アントニオが足を負傷しているマヌエルを船で目的地まで送り届けた後の場面では、やはりマヌエルのアントニオに対する待遇が突然 usted から tú に代わっていることが分かる。上記の考察から、例外はあれど、以下のように捉えることができる。

(4)　日本語　　相手に対する待遇表現の形式が変化しない言語
　　スペイン語　　する言語

2.3. 年齢・社会的地位と心理的距離

同じ状況下でも日本語であれば待遇表現がこのように変わることはない。何故なら前述の通り日本語では相手の「年齢・社会的地位」という、現在会話をしている相手との関係において不変のものを待遇表現の選定要因としているためである。先に生まれた人物が自分にとっての「目上」であることは永続的であり、また日本語では、教師や上司といった自分よりも社会的地位が高かった人物が退職などで以前のような地位を失ったとしても、目下からは昔のままの待遇が続き、その瞬間から待遇が普通体に切り替わるということは考えにくい。

他方スペイン語では山田他（1995：106 ～ 107）でも「tú, usted の使い分けは話し手が聞き手を＜自分の仲間＞と見て話すかどうかに関係する。

仲間意識・同族意識がある場合は年齢差などを無視して tú を選択することになる。」と述べられている通り、流動的で変化しうる「心理的距離」を対象としているゆえ、上記のような待遇表現の切り替えが自然と行われるのである。

つまり (2) の＜引用 1 ＞では「共通の友人がいる」という事実が、そして (3) の＜引用 2 ＞では「足を負傷し動けなくなっていた自分を助け、目的地まで送ってくれた」ことが、話し手の聞き手に抱く心理的距離を縮め、敬語体 usted から普通体 tú への対話モードの切り替えに至ったのだと考えられる。このようにスペイン語では日本語と反対に「心理的距離」の要因が最も優先されやすいのである。

確かに日本語でも初対面の相手との会話の中で共通の友人の存在が明らかになれば、それだけで相手に対する親近感は深まる。けれども、その相手が目上である以上、やはりその親近感よりは年齢や社会的地位といった相手の社会的属性の方が優先され、待遇表現の形式が敬語体から変化することは通常ない。(3) のような場合も同様である。危機から救い出してくれた相手に対する信頼がどんなに厚くなろうとも、目上であるからには敬語体で待遇し続けることが社会的な規範とされている。

スペイン語の tú・usted の選択には文化や地域を始め個人の年齢、性別、イデオロギーなど様々な諸要因が関係しており、その使用は最終的には個々人で異なるが、スペインでは、現在のところ、年齢が高い人々は親しい相手に対しても“usted”を好み、反対に若い人たちの間では“tú”が優勢の傾向にあるといわれている。しかしながら、それでも一般的には usted よりも親しみを表す tú の方が好まれ広く普及している。スペイン語では、親しい間柄になれば高齢者に対する場合を除き tú で会話をすることは非常に自然なことで、むしろ“tú”での待遇はぶしつけな「タメロ」としてではなく、話し手が自身の領域内に聞き手を入れていることを間接的に表す「親愛の表現」として互いに認識されるものである。

最近では、上記の例のような心理的距離を縮める出来事が両者間に起こらずとも、usted で話す堅苦しさを回避するため、出会ってすぐに「podemos

tutearnos, ¿no crees?　互いに tú で話さない？」などと一方が促し tú に切り替えることも多い。(*Una nota falsa*　(2003：14)) これは見せかけの心理的距離ではあるかもしれないが、やはり相手の年齢や社会的地位よりも心理的距離を優先させている証拠である。

このように、日本語もスペイン語も敬語体と普通体を持ちあわせていることは共通しているが、待遇表現を選ぶ際の「優先要因」の相違からその働きはまるで異なっている。

日本語の「敬語」は相手に対する敬意を含み、話し手自身と聞き手が異なった立場にいることを伝える、すなわち相手が話し手よりも「上」であることを示す「敬意表現」である。しかし本章で明らかになったようにスペイン語の敬語体“usted”は、本来相手との心の距離の大きさのみを表す「疎遠表現」であり、それが「心理的距離」が深まっていない相手や、それに相当する場面と融合することで、あたかも日本語の敬語のような働きをするのである。日本語の敬語は「縦の表現」、スペイン語の usted は「横の表現」ともいうことができるかもしれない。

この相違については第 4 章で Sperber & Wilson によって提唱された「関連性理論」と絡めながら再び詳しく論じる。

次は、「心理的距離」が「疎遠」に解釈される例である。

(5)　—Por una vez voy a necesitarle. ¿Qué sabe usted de las esmeraldas de la duquesa Von Bacher?
いつか一度は初めてあなたが必要になるでしょう。ボン・バチャー公爵夫人のエメラルドについて何かご存じですか？

これは前述の探偵ペペ・レイシリーズの一つ *L♡LA*　(1987：22) におけるロメラレス警部のペペに向けた言葉である。探偵ペペと警部ロメラレスは、仕事柄新たな事件が起こる度に何度も顔を合わせてきたが、性格の不一致から互いに常に一定の距離を保っている。もっとも読者である筆者からすると心の底では信頼し合っている印象を受けるのであるが。それゆえ

付き合いの長さに逆らうように両者は“usted”の形を意識的に使い続けている。一度別の作品中で、ふいにペペが「マリアノ」とロメラレスをファーストネームで呼んだことがあるが、ロメラレスの「マリアノなんて呼ばないで下さい。私がそのように呼ばれることが耐えられないのをご存じでしょう。」という一言で、ペペは即座に呼称を彼のファミリーネームである「ロメラレス」に戻すほどである。

このように出会いから長い月日が経っており、すでに相手との間に「親しさ」なるものが生まれていてもよい時期に達していながら usted を選択し続けることは、相手が目上である以上、日本語の枠で捉えると当たり前のことであるが、usted が「尊敬」ではなく「心の距離の遠さ」を意味するスペイン語の世界においては、未だ相手への信頼が生まれていないことを公言してしまうことと同意であり、日本語母語話者が想像もしないようなマイナスのニュアンスを含む場合がある。

しかしながら、出会いからしばらく経っていながら usted を使い続けることが必ずしも「疎遠さ」や「感じの悪さ」につながるというわけでもない。

(6) a. Miguel ―No te rías(tú), Lola.
笑わないでよ、ロラ。
Poderoso caballero（2003：9）

b. Susi ―¿Lo dice(usted) en serio, jefe?
本当に言っているのですか？
DO DE PECHO（1988：63）

上の二つの例は探偵事務所に勤務しているミゲルとスシの上司に対する言葉である。作者が異なるため、両者に面識はない。

アットホームな探偵事務所であることもあり、ミゲルは普通体 tú での待遇はおろか、上司のロラをファーストネームで呼んでいる。日本語であれば快く思われないであろうこのような表現も、相手への信頼度すなわち

「心理的距離」で待遇表現を決める言語であるからこそなのだといえる。

他方、スシはすでにお馴染みの探偵ペペの有能な年下の女性秘書で、付き合いも長く、両者はまさに良きコンビである。けれどもスシは常にペペには敬語体 usted で会話をし「上司」を表す“jefe”という語で呼び掛ける。

「付き合いの長さに反比例して usted を使い続けること」の生み出す効果は先に述べた通りであるが、会社などの改まった公の場では、スペイン語でも、その人との関係性に関わらず個人的に敬語体 usted が選択されることもあり、そのような場合は反対に敬語体 usted が「丁寧さ」といったプラスの効果を相手に与えることもある。実際に usted を使用し続けるスシは、感じの良い人物として描かれている。ペペからしてみれば、ロメラレスもスシも共に仕事上の関係であるが、いつも機嫌が悪い前者とテキパキと働く後者の人柄も最終的には関係するのではないかと考えられる。一般的には“tú”が優勢傾向にあるが、このようにその場の状況と上手く融合した結果、“usted”が「丁寧さ」や「礼儀正しさ」のニュアンスを生み出す場合もある。

2.4. tú から usted への切り替え

本章で最も重要である概念「心理的距離」は近づくばかりでなく、時には遠ざかることもある。つまりこれまで論じてきた例とは反対に“tú”から“usted”への切り替えが行われることもあり、話し手が聞き手に怒りを感じた際にはこのような現象が起こる。次の例は *Poderoso caballero* (2003：30 ～ 31) からの引用である。女性探偵のロラ・ラゴは、自殺したギジェルモの息子、チェマから事件に関する情報を聞き出すべくギジェルモの旧友の侯爵夫人だと偽り、グラシエラ・ヒャコメッティという偽名で約束を取りつける。

(7)　＜引用 3 ＞

—Graciela Giacometti, supongo. —me ha dicho Chema dándome la

mano.

グラシエラ・ヒャコメッティですよね。―チェマが私に片手を差し出しながら言った。

―Efectivamente. Mira, te presento a mis abogados, Miguel Hurtado y Francisco de Arganda.

その通り。見て、君に私の弁護士たちを紹介するわ、ミゲル・ウルタドとフランシスコ・デ・アルガンダよ。

―Sentaos (vosotros), por favor.

座ってよ。

Es el típico joven que tutea a todo el mundo. Incluso a una《marquesa》como yo.

皆に tú を使うなんて典型的な若者だわ。私みたいな《侯爵夫人》にまで使うなんて。

―Supongo que tu padre te contó lo nuestro...

我々のことはお父さんが話したと思うけど・・・

―Pues, la verdad, no.

実は、聞いていません。

―Era muy discreto, mucho―he dicho yo con tranquilidad―. Hace mucho tiempo, tu padre me dijo que en su testamento me iba a dejar a mí una parte de sus negocios... Por eso están aquí mis abogados.

彼はとても慎み深かったわ、とても。―私は落ち着いて言った―。もうずっと前のことだけれど、君のお父さんが遺言で事業の一部を私に残すと言っていたの・・・だからここに私の弁護士たちがいるのよ。

―Pues, lo siento, pero no le ha dejado nada a usted... Me lo ha dejado todo a mí.

申し訳ありませんが、父はあなたに何も残しませんでしたよ。全て私に残してくれました。

Me ha llamado de usted. Está enfadado. Un éxito.

私を usted で呼んだわ。彼は怒っているのね。成功だわ。

ギジェルモの自殺に関する有力な情報を聞き出したいロラは、遺言に関する嘘を持ち出し、チェマを興奮させることに見事成功する。死んだ父親をよく知る人物として、ロラに親しさを感じていたチェマであったが、ロラのあまりにも一方的過ぎる申し出に腹を立て、彼女に対しての心の距離が広がった瞬間から“usted”でロラを待遇し始め、結局物語の最後までその形式が再び“tú”に戻ることはなかった。

このように、「心理的距離」で相手への対話モードを決めるスペイン語では「（相手の）年齢・社会的地位」を待遇表現選定時の優先要因としている日本語よりも、より柔軟にこのような待遇の変化が生じるのである。

第 3 章　待遇表現のメカニズム

3.1. スペイン語における「年齢・社会的地位」

両言語において優先される要因を見てきたが、それでは優先されない要因、すなわち日本語における「心理的距離」、スペイン語における「（相手の）年齢・社会的地位」はそれぞれどのように考慮されるのだろうか。

本稿では、現代スペイン語で書かれた教材用小説（1980 年代から 2000 年代）の相手に対する待遇表現が変わる会話を注視してきたが、それらの会話における待遇表現が変化する前の待遇表現、すなわち初対面時の待遇表現に焦点を当ててみると、興味深いことに、そのほとんど全てにおいて、年齢や社会的地位が高い人物から低い人物に対する待遇は tú もしくは usted であったのに対し、その反対の目下から目上に対する待遇は、敬語体 usted ただ一つであった。

同じことが日本語でもいえる。例えば、大学院のある講義で担当教員は筆者を普通体で待遇した。これは筆者の方が年齢・社会的地位が「下」であるゆえ当然のことといえる。

他方で、筆者に常に敬語で話しかける教員もいる。これは両者の年齢・

社会的地位の原則に従ってはいないが、聞き手に対する丁寧さの効果から、相手が目下であっても、目上の人物が敬語を使用することは日本語においてはしばしば起きることである。

このように目上から目下に対する待遇は敬語体の場合もあれば、普通体の場合もあり選択が自由である一方、目下から目上に対する、つまり筆者から前述の教員への待遇は敬語体ただひとつが通常望ましい。

対話者の年齢や社会的地位に応じてしかるべき待遇表現を選定している日本語と同様の現象が、初対面時の待遇表現で見られるということは、スペイン語でも初めは相手の年齢や社会的地位で待遇を決めているのではないかと考えられる。

すなわち初対面で、まだ心理的距離が分からない、あるいは出来上がっていない段階では、相手の年齢や社会的地位といった目に見えるものから待遇表現の選択を行うほか方法はない。そして前述の通り元来“tú”は相手との心理的距離が近いことを表す人称代名詞であり、他方“usted”はその距離が遠いことを伝えるものであった。スペイン語では、年齢や社会的地位において目上に当たる人物が、対話者の自分よりも低い年齢や社会的地位から「君とはこれだけ心理的距離を縮めても良いよね。」と普通体 tú を、もしくは相手と一定の距離を保つため敬語体 usted を選択することができる。

他方、目下の人物は日本語と同様に、相手の年齢や社会的地位が自分よりも高いことから、初めは距離を縮めることはできず、usted を使って対話者との間に一定の距離を保たねばならない。

中南米ではまた異なった結果が見られるかもしれないが、これらの教材が出版され少し経った頃から、スペインにおいては、若者を中心に相手がどのような人物であろうと初対面から tú で会話を始めるスタイルが定着しつつある。今回集めた資料体の中でも、唯一初対面時から相手を tú で待遇する人物がいた。(7) ＜引用 3 ＞のチェマである。けれども、この場合 Es el típico joven que tutea a todo el mundo. Incluso a una《marquesa》como yo. （皆に tú を使うなんて典型的な若者だわ。私みた

いな《侯爵夫人》にまで使うなんて。）と心の中で密かに不平をもらしているように、聞き手であるロラ・ラゴはこの現象を好ましく感じていない。

このように、スペイン語では複数の要因の中から、初対面時は「（相手の）年齢・社会的地位」の要因が優先要因として考慮される。「心理的距離」は変化するゆえ、何かをきっかけにまた変わるかもしれないが、その後相手に対する最初の心理的距離が決まると、（近い／遠い）、今度は「心理的距離」の要因に従った、二重の待遇表現の選定が行われるのである。

初めに聞き手の年齢や社会的地位という相手の社会的属性で待遇表現を決めることは日本語と同じであるが、その後心理的距離に基づいた待遇表現に移行し、目上に対しても普通体 tú が使用可能になることはスペイン語特有の、そして最も興味深い現象である。

ところで、この敬語体 usted から普通体 tú への変更は、必ず行われるというわけでもなく、その選択は個々人の判断に委ねられており、またその選択権は目上の人物が有している。引用した小説においても、ある話し手が目上の人物への待遇を変えるのは、相手に「tú で呼んでよ。」と促されるか、相手が日本語の普通体に相当する親愛の tú で待遇してくれている場合であった。目上が自分に対し日本語の卑語に当たる、侮蔑の tú を用いていたり、自分を usted で待遇し続けている以上、目下の人物は usted を使用し続けていた。このようにスペイン語においては「心理的距離」が大きな影響を与えていることはすでに見てきた通りであるが、同様に「（相手の）年齢・社会的地位」もまた重要な働きをしていることが分かる。

3.2. 日本語における「心理的距離」

「2.1. 日本語における優先要因」の節でも触れたように、日本語の待遇表現に「心理的距離」が反映されることは通常ない。

確かに、日本語でも特に親しい目上の人物に対しては、より敬意の込もった印象を与える尊敬語や謙譲語から、よりインフォーマルな効果をもたらす丁寧語（です・ます調）への移行がしばしば見られるが、このような移行も敬語の範囲内で行われることに過ぎず、スペイン語のような感情に

従った普通体への切り替えは日本語では一般的ではない。日本語の待遇表現のメカニズムは次のようになっていると考えられる。

日本語では相手の年齢・社会的地位で待遇表現を選定するゆえ、対話者に親しさや信頼のような感情を抱いていようといなかろうと、その感情が言語形式に表れることはなく、「心理的距離」の要因は完全に「年齢・社会的地位」の要因の背後に隠れ、見えなくなってしまっている。

つまり、スペイン語は「(相手の)年齢・社会的地位」による tú・usted、そして心理的距離からの tú・usted の二段階の待遇表現の選定が行われており、心理的距離に基づく待遇表現に移行した後は、自身に相手への感情を分かる形で表現する「気持ちを見せることで距離をとる言語」である。

他方、日本語は相手に対する「心理的距離」の有無に関わらず、待遇表現は「(相手の)年齢・社会的地位」で決められるのが一般的で、言語形式の上では「心理的距離」は「年齢・社会的地位」の要因の陰に隠れている。このように「(相手の)年齢・社会的地位」で待遇表現を決める日本語は「気持ちを見せないことで距離をとる言語」であるといえる。

3.3. 他者の認識の仕方の相違

両言語の待遇表現の構造の相違は、「話者の他者の認識の仕方」とも関係がありそうである。

同様のことが滝浦(2008:9)でも述べられているが、例えば、筆者は学内で教師たちから見れば「学生」であるが、ひとたび今日の昼食を買おうとコンビニエンスストアに入れば店員からは「客」と認識されるであろう。そしてコンサートに行けばその会場では「ファン」とみなされるように、人は皆それぞれその場その場で全く異なった役割を有している。そしてそのうちの一つを担っている状態、例えば教師と生徒という関係で互いに人は出会う。

日本語を母語として生活しているとなかなか気づきにくいことではあるが、相手が自分にとって本当はどのような人物であるのかは、出会いから

しばらく経たなければ判断が出来ない、といえる。

その点でスペイン語の二段階の距離の取り方はこの原則を上手く利用しているように思える。初めは、互いに出会った時の年齢や社会的地位に基づき待遇表現（tú あるいは usted）を決め、人間関係は無数であるがゆえ、一概に状況を断定することはできないが、何らかの形で当事者間に「信頼」が生まれた後、今度は自分にとっての「相手」と認識が変化し、心理的距離からの tú・usted の使い分けが生じるのである。

それに対し、日本語では初対面時は同世代であっても普通体から始めず、この場合「中立」のニュアンスを持つ「です・ます調」で話し、その後普通体を使い始めるという現象はあるが、基本的には初めて出会った際の年齢や社会的地位だけをもとに両者の待遇表現の形式が続いていき、感情に伴い言語形式が変化することは稀である。

以上のようにスペイン語では他者の認識が二度行われる。すなわち一度目は誰が見ても明らかなその人物の年齢や肩書を頼りに、そして二度目は相手に抱く個人の感情をもとに認識が行われるのである。

他方、初対面時に対話者が有していた年齢や役割を判断材料にし、その待遇がそれ以降も長期に渡り継続されるのが日本語である。無意識的に行われ、普段はあまり意識することのない相手の認識方法も、このように待遇表現の選定に影響を与えていることが確認できる。

第 4 章　関連性理論

4.1. 文脈的含意

日本語の普通体とスペイン語の“tú”そして敬語体と“usted”の関係は、近年語用論の分野で注目を集めている Sperber & Wilson(1986) によって提唱された「関連性理論」の枠組でも捉えることができる。

例えば翌日草野球の試合を控えた野球少年がいたとする。試合は屋外で行われるため、初めて選手として活躍できる機会を与えられたその少年にとって雨は最大の強敵である。入念にてるてる坊主を作り、朝を迎えた。

目覚ましの音で飛び起きた少年であったが、窓越しの世界は薄暗く、外を歩いている人々は皆傘をさしている。この瞬間、少年をはじめ、おそらく人間であれば誰もが「今日の草野球の試合は中止だ。」と悟るであろう。興味深いことに「よし！試合は予定通り行われるぞ。」と解釈されることはない。これはひどく当たり前のことのように思えるが、実は我々人間の頭の中で「推論（inference)」という作業のもと「文脈的含意（contextual implication)」が導き出されることで、皆そろって「今日の試合は中止である」という共通した解釈に辿り着くのである。「推論」を図式化すると次のようになる。

(8) PならばQである・・・前提① 雨が降れば試合は中止である
Pである・・・ 前提② 雨が降っている
ゆえにQである・・・ 結論 試合は中止である（**文脈的含意**）
今井（1995：20）

つまり少年の頭の中には「明日雨が降れば野球の試合は中止である。」という想定（assumption（前提））があり、朝起きて「今雨が降っている」というもう一つの想定（前提２）を窓の外の状況から得た。そしてこれら二つの前提から推論を行った結果「野球の試合は中止である。」という「文脈的含意」が起こったのである。

窓の外を見た少年は誰に言われたのでもないが、頭の中で自身の華々しい初舞台が雨と共に流れていったことを推論で文脈的含意から悟った。今井（1995：22）では「発話の内容と、聞き手が持つ想定（つまりコンテクスト）の両方を前提とした推論の結果、聞き手の認知環境を変える想定が得られたとき、そこには文脈的含意（contextual implication）が生じたと言う。文脈的含意を持つ発話は関連性を持つ。」とされている。

4.2. 表意と推意

前述の文脈的含意は、既に人間の頭の中にある情報・知識とその場の状

況との推論から導き出されるものであったが、我々はあまり意識することなく日常の会話においても頻繁にこれを生じさせている。

(9)　A―　明日、新しくできたテーマパークに行かない？
　　B―　アルバイトの給料日前で・・・

Bの発話を正確に言い直してみると、「今、Bは新しくできたテーマパークの入場券を買えるほどの十分なお金を持っていない。」となる。このBの発話から、誘ったAは「明日Bはテーマパークへは行かない。」と判断するはずである。B自身の発話は「アルバイトの給料日前で・・・」だけであるが、そのテーマパークの入場券が学生にとっては値が張るものであり、概して給料日前は生活がひっ迫するものであるいう、以前からの知識と、Bの「アルバイトの給料日前で・・・」という発話からの推論で「Bが明日そのテーマパークへは行かない」という文脈的含意が推論される。

上記のB自身が発した「アルバイトの給料日前で・・・」といった、いわば誰の目にも明らかな「言われたままの内容」は関連性理論においては「表意(explicature)」と呼ばれるのに対し、「明日Bはテーマパークへは行かない。」という文脈的含意すなわち「言われている以上の内容」もしくは「直接言われてはいないのにも関わらず導き出される内容」は「推意(implicature)」と呼ばれる。人間は相手の発話からこの「言われたままの内容」にとどまらず、「言われている以上の内容」もその状況と関連づけて導き出すことができる。そしてそのことを互いに理解しているゆえ、時に文字通りの発話を用いて全く別の内容を伝え合うのである。

けれども、ここで注意しなければならないことは、各発話に「表意」は必ず存在するが、「推意」は常にあるとは限らないという点である。

例えば上記の例においてBという人物の「今、給料日前で・・・」という発話には「Bはテーマパークの入場券を買うことができるだけの十分なお金を持っていない。」という直接的な意味である「表意」と、そこから推論によって導き出される「そのような状況であるから、明日テーマパー

クへは行かない。」という間接的な「推意」が共存していた。

しかし、例えば大学からの帰り道、友人との会話における「そういえば、昨日あなたが好きな歌手がテレビに出ていたけど、見た？」という発話は「言われていること」そのものであり、そこから推論されるべき何かを余剰に含んではいないということは一目瞭然であろう。このような場合は「表意」のみが存在していることになる。

つまり、そのままの内容である「表意」はその場の状況から一義的に決まる意味を持つが、推論から得られる「推意」は各状況との結びつきが強く、話し手と聞き手の知識状態によって意図する内容も異なる。

(10) 「今何時ですか？」

トマス (1999：57) において、上記の発話例のもたらす効果は、発語や発語内行為を説明する箇所で登場するが、「表意」と「推意」の説明にも使用できる。相手が上記の発話を行った場合、まず我々聞き手が頭で思い浮かべることは「相手が現在の時間を知りたがっている」ということであろう。この「言われたままの内容」である表意は、相手が友人であれ、教師であれ、そしていかなる状況においても「相手が時間を尋ねている」という「そのまま」の意味で聞き手に伝わる。ゆえに我々は、この発話を聞くなり時計あるいは携帯電話を確認し、相手に時間を教える行為を行うに違いない。けれども、次のような状況においても同じことが成り立つであろうか。

例えばある学生がゼミナールのある日に大寝坊をしてしまったとする。普段家を出る時間に起きてしまったその学生はひどく慌ててしまい、携帯電話も持つことなく大急ぎで家を飛び出す。やっとの思いで研究室に到着した彼を前に、何度電話を掛けても連絡がつかないことにいらつきを覚えていた指導教官が言う、「今、何時ですか？」と。

この状況で指導教官がただ単に学生に現在の時間を聞いているのではないことは明らかである。つまり「今、何時ですか。」という時間を尋ねる

形式を用いながら、遅刻をして連絡のなかった学生に「嫌味」を言ったのである。時間を尋ねる形式から伝わるこのような「嫌味」、すなわち推論から生じる推意は、学生が大遅刻をし、指導教官がそれを快く感じていない、という状況でなければ導き出されないものである。

興味深いことに、言われているのは「今、何時ですか？」という発話のみであるのにも関わらず、その場面、場面でこの発話の生み出す解釈は大きく異なっている。非常に明白でオーソドックスともいえる、そのままの意味の「表意」が各場面の文脈条件により本来の意味とはかけ離れた全く新しい意図を生じさせるのである。

4.3. 関連性理論における両待遇表現

関連性理論の「表意」と「推意」の概念は、日本語とスペイン語の待遇表現とどのように結びつけられるだろうか。

確認であるが、日本語の敬語とスペイン語の usted は敬語体の形式としては酷似していた。しかしながら、両言語の待遇表現を選択する際の「優先要因」の相違から、それぞれその意味することは全く似て非なるものであった。

「（相手の）年齢・社会的地位」が優先要因である日本語の敬語は、相手への敬意を含み、聞き手の立場が話し手よりも高いことをそのままの意味で伝える。ゆえに、それが与える解釈は「表意」と捉えられる。

他方、心理的距離を優先要因とするスペイン語の usted の持つ本来の意味は「相手との心理的距離の遠さ」のみであったが、これがしかるべき場面や相手に使われることで、日本語の敬語のような丁寧なニュアンスを持つことがある。本来は心の遠さからくる「疎遠表現」であるのにも関わらず、各場面と結びつくことで「敬意表現」に変わるスペイン語の usted が与える解釈は「推意」によるものといえる。

このように関連性理論の枠で捉えてみても両言語の待遇表現の働きは異なっていることが分かる。

―結論―

待遇表現とは「同じ事態を述べるのに、対人関係や場面差などに配慮して使い分ける表現」を指し、日本語とスペイン語の待遇表現は形の上では似ている。

しかしながら、スペイン語は「目上の人物に対する待遇が途中で敬語体から普通体に代わり得る」という特徴を持っており、これは日本語では一般的とは言い難い現象であった。このような相違は両言語間における、待遇表現を選定する際の優先要因が異なっていることに起因している。

日本語は互いの年齢・社会的地位をもとに待遇表現を使い分け、相手に対する待遇形式は基本的に途中で変化することはない。話し手の相手に対する親近感や信頼といった感情の有無に関わらず、それが言語形式に表れることはなく、形式と感情が常に一致しているとはいえない。ゆえに「気持ちを見せないことで距離を取る言語」と捉えることができる。

他方、スペイン語は日本語同様、相手の年齢・社会的地位に従った tú・usted、そして心理的距離からの tú・usted という二段階の言語形式を持ち、心理的距離で待遇表現を決める段階に達した後は、形式と感情は常に一致する。二段階の tú・usted ではっきりと相手に分かる形で自身の感情を表現しており、「気持ちに対応して言語表現を変える言語」と考えられる。

参考文献

今井邦彦 (1995)「関連性理論の中心概念」,『月刊言語 4 月号第 24 巻第 4 号』東京：大修館書店　pp. 20 － 29.

江藤一郎 (2003)『基本スペイン語文法』, 東京：芸林書房

熊井浩子 (2003)「「待遇表現」の諸側面と,その広がり―狭くとらえた敬語,広くとらえた敬語―」,『朝倉日本語講座⑧敬語』北原保雄監修, 東京：朝倉書店　pp. 31 － 52.

滝浦真人 (2008)『ポライトネス入門』, 東京：研究社

田中道治 (2003)「初級日本語教育と待遇表現」, 人文社会学部紀要 VOL.3 pp.61 － 72.

辻村敏樹 (1958)「待遇語法」,『続日本文法講座―1』, 東京：明治書院

トマス・ジェニー (1998)『語用論入門―話し手と聞き手の相互交渉が生み出す意味』, 浅羽亮一監修, 東京：研究社

日本語記述文法研究会 (2009)「第 13 部　待遇表現」,『現代日本語文法⑦』, 東京：くろしお出版

山田善郎監修 (1995)『中級スペイン文法』, 東京：白水社

Sperber, D. and Wilson, D.(1986) *Relevance: Communication and Cognition.*(2nd ed., 1995) Oxford: Blackwell,―. 内田聖二・中達俊明・宋南先・田中圭子（共訳）,『関連性理論：伝達と認知』, 東京：研究社, 1993

資料

Miguel de Loreto y Santos, Alba(1988) *DO DE PECHO*, Madrid: EDI-6, S.A.

Miguel de Loreto y Santos, Alba(1987) *El hombre que veía DEMASIADO*, Madrid: Edi6, S.A.

Miguel de Loreto y Santos, Alba(1987) *L♡LA*, Madrid: Edi6, S.A.

Miquel, Lourdes y Sans, Neus(2003) *Poderoso caballero*, Barcelona: Difusión S.L.

Miquel, Lourdes y Sans, Neus(2003) *Una nota falsa*, Barcelona: Difusión S.L.

Ortiz González, Victoria(1991) *En piragua por el Sella*, Madrid: Universidad de Salamanca y Santillana,S.A.